

# 仏典を読む (十二)

## 目の醒めたらんほど

村上隆彦

『徒然草』の中で兼好は次のように書いている。

或人、法然上人に、「念仏の時、<sup>ねぶ</sup>睡におかされて行を怠り侍る事、いかゞしてこの障り<sup>さは</sup>を止め侍らん」と申ければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。(略) 第三十九段▽

この一節を初めて読んだ時、私は心を打たれた。「いかゞしてこの障りを止め侍らん」という、「或人」の正直な告白と真摯な問いかけに対する法然の途方もなく深い寛容の態度がそこにみられる、と思つたからである。ほとんど意表をつかれる思いで「或人」はこの言葉を聞き、瞠目し、息をのみ、そしておのれを恥じたにちがひなく、その有様が生き生きと伝わってくるように思えた。「いと尊かりけり」と兼好が賛嘆したもの、法然のこの大きさに關してであつたらう、と私は思った。

けれども、その後三十年余り、私は毎年一度は『徒然草』を読むようにしてきたが、或る時ふと、若年の頃の私は法然の言葉を一面的に理解していたのではないか、と考えるようになった。日本古典文学大系『徒然草』の頭注で西尾実氏はこの箇所を注して「もし目が醒めたら、その間に念仏をなさい。人間性をよくとらえた答」と説明しているが、この西尾氏の理解も法然の寛容の深さ、度量の大きさということに力点を置いたものであるように思われる。法然の寛容の深さ、度量の大きさがここに如実に示されていることにまちがひはないが、しかしそれだけではないように私には思われてきた。

「或人」は、「念仏の時、睡におかされて行を怠り侍る事」と云っている。さすれば、この「睡」は深夜の睡眠であるはずがなく、念仏という行のただなかにきざしたいわば居眠りであるとみてまちがひなかるう。一方、「或人」は、「睡におかされ」ることによつて「行を怠り侍る事」と云っているが、よく考えてみれば、「睡におかされ」というわれ人ともに日常茶飯のこととして繰り返している行為は、その者がその時たずさわっている「行」に専らでないこと、「行」を怠るということが事実としてそこにあり、そうした懈怠の心にしのびこむ形で生じてくるものであつて、「或人」が云っている順序とは逆である。「行」に専心したならば「睡」は介入しようがない。「行」を行う

とはそういうことであろう。法然の言葉は、その機微を深いところで衝いているにちがいないと思う。

また、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」という法然の言葉を素直に受けとめるならば、「目の醒め」ている時に行う「念仏」の持続は、同時に、「目の醒め」つづけてある状態の持続にそのままつながる、という指摘がそこには含まれていると理解していいのではないかと思う。仮に、第一の「睡」があり、それに続く第二、第三の「睡」があり、そうした「睡」の間に「目の醒めたらん」状態があるとして、その目覚めの時に専修念仏に心がけるならば、念仏の途中はむろん、念仏のあとにも先にも「睡」は生じようがない。あるのはただ「目の醒め」た状態と念仏だけである。「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」という法然の言葉の根底には、そうした厳しい教理が潜んでいたのではないか、と思う。

それなくしては、「明日の大事をかかじと、今日はげむがごとくすべし」「一丈の堀をこえんと思はん人は、一丈五尺の堀をこえんとはげむべし」「たとひ余事をいとなむとも、念仏を申し申しこれをするとおもひをなせ。余事をし、念仏すとおもふべからず」「念仏の義をふかく云事は還て浅きことなり。義は深からず共、欣求だにも深くば一定往生はしてん」という法然の教えも「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名く。彼の仏の願に順ずるが故に」という善導大師の教えもあり得ないと思うし、「親

鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけまひらすべしとよきひとのおほせをかふむりて信するほかに、別の子細なきなり（略）たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」という、『歎異抄』の伝える親鸞の絶対の信仰も成り立ち得ないように私として思う。また、それなくしては、『往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり』と言はれけり。これも尊し。また、『疑ひながらも念佛すれば、往生す』とも言はれけり。これも、また尊し。——先に引いた『徒然草』の文章に続けて、兼好が記しているこのような教えも出てきようがない、と思う。

法然の寛容は、単純な寛容でも無際限な寛容でもない。寛容の底を貫き通す一筋のものがある。それは、専修念仏という強い光源から発して、専修念仏という究極に回帰する一條の光に貫かれたものであるように思う。「さけのむは、つみにて候か。答 まことにはのむべくもなければどもこの世のならひ」——こうした認識と、その認識の上に成り立ったこのような寛容には、或る恐ろしい力が内蔵されている。単純な寛容、無際限な寛容に徹することによってそれをのり越え、「目の醒めたらんほど、念仏し給え」というより高次な寛容の世界へ、言い換えれば、より純粹で単純な寛容、より純粹で無際限な寛容の世界へ私たちを招き入れることになった。それは兼好の云うように「いと尊かりけ」ることでもある。